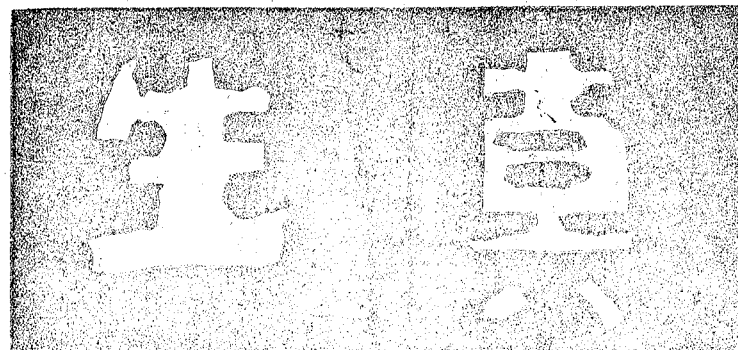




第二卷第二號

眞生の大道

□自分は何處から生れたのか父母の又父母、又其の父母と其の生命の根源を尋ねれば遂に萬物の根源たる宇宙の生命に歸せざるを得ぬ。

□自分の人格は何處から來たのか人格の源、又其の源と其の本源を尋ねれば又宇宙の生命たる如來の人格に歸せざるを得ぬ。

□かくて我等の生命と其の人格の中心は之を宇宙の本源に尋ね之を宇宙の人格に歸してこそ、そこに永遠の生命もありそこに無限の向上定立もある。

□而て此の永遠の生命と無限向上の生活こそは我等が如來を中心とする人類理想の生活ではないか、眞生の大道ここに開け、眞實の人生ここに顯はる。

□總ての科學も哲學もあらゆる倫理も道德も如來を離れて何の生命ぞや、如來は生命の源泉であり、如來は人格の中心である。

□そこに永遠の生命は輝き、そこに無限の向上は成立つ、立てよ我朋、眞生の世界に、眞生の大道に、如來を離れて眞の人生は無い。(念)

眞生

第二卷二號

宗教の本義へ歸れ

■大きな店の前に立つた神經質な民衆が看板も見ないで一目散に駆け込んだ。差當り流行親鸞が賣子を操つて大變な繁昌だ、老も若きも男も女も善人も惡人も罪も虚偽も賢者も頓馬も十把一束で眞裸歡迎だと呼び込んでゐる。お隣の功徳適面のお大師黨が商賣繁昌家内安全息災延命の現世嘉樂の大人氣だ、そのまゝでよい、只眞直に行け」と叫ぶお浄土屋の現世と未と、この掛持極樂の景品は尙更有難い感じがする、左にアーメン右にデン／＼と、やうに見當り付かずマゴ／＼してゐる。民衆は本當には一體何が一番いのめ、あゝ惱しき民衆よ、お前は最初に一番大切なものを忘れてゐる、何を求め、自身の中に這入つて來たのか、余りに輕卒過ぎた、お前は表の看板を見忘れたるよ、生命の道——宗教だ。

■出る、大看板の眞先へ、宗教の本義に、それは取も直さずお前の本心の求むる生への面前であるのだ。そこからだ、選擇の宗教から宗教の選擇に入るの。

■お前の求め行かんとする道は何處にあるのか、それはお前の外ではないお前自身の内にあるのだ、釋尊が生きたクリストが生きた覺路に生きたる事の、釋尊がクリストである、又釋尊が最後でもなければ法然がどん詰りでもない、釋尊や法然に鑄り出されてならぬ。白熱の中に躍進してゐるのだ、クリスト型や法然の掘り出した彼等の道は吾々に取つて先人の意義であり價值である、彼等の生きた理想に生きたよ、それは實に偽らざる自己に見出す、俺のみに許された生きる道である。

■再び云ふ、求めよ自己に、梅の花は終日探めて得ざりしも還つて我家の軒端にあつたのだ、求むる努力の中に絶えず深められて行く。(顯道)

目次

- 宗教の本義に歸れ 土屋 綱道
- 見佛意義 (一) 土屋 綱道
- 廢物利用の文化 (二) 中井 常次郎
- 鐵條錄 (十一) 碩 岡 潤
- 私の信仰道 小幡 空越

獨語

■思想の變つて行くのを總て惡化だと云ふ老僧に遇ひました。傳統的に教へられて來た佛教の概念と形式に釋尊の眞實があるものと信じてゐる人でせうても後生一大事と確かり捉えてゐるところは慧い様でもあり馬鹿の様でもある。清濁合せ飲んで齟齬した後これを批判裁斷して定めるべきだ目前に展開して來るものを外來だとか上謂子だとか云ふて毛蟲の様に厭惡する事は餘りに輕卒である頑迷も度を越すと骨蒸品の價もない。

■僧侶の年中行事の一つである年賀廻禮について：年賀の意志表示が相手の方へ「御苦勞様」と受け入れられる程、型に鑄り出されてゐる。畢竟それだけ人間が器械的な運動に生命を置く様になつてゐるのだ型のまゝに動いてゐる間は人間の生命的躍進がない時で死の狀態にあると云はねばならぬ。死は停滯だ、清落沈倫の相対人間文化の停止であり墓場の世界だ。でも甘いものを甘いと云ふと甘い事實と觀念が深められる様に型通りに判り切つた事もやつて行く事實からは人間生活の潤があるものだ。(顯)

見 佛 意 義 (一)

一、見佛は可能なるや

土 屋 觀 道

客、近頃は殆んど各方面に渡つて世間が行きつまつて來たやうですね、宗教も同じでせうか。

主、さうですね、殆んど社會も國家も亦個人の思想、生活に至るまで全く行つまつて來たやうです、然乍ら之も見やうでは又人類文化の一過程に過ぎないとも見られませう。宗教も亦同じです。

客、でも若しこのまゝにして時代の推移に任かせるならば我國の將來は實に恐るべきものではありま
すまいが、近來の青年思想の變化の如き殆んど忠君だの愛國だのいふ人は無いやうではありませんか。
まして日本男子だの大和魂など藥にしたくてもきくことはできないやうではありませんか。殊に今日の
宗教界の如きはこのまゝ行くならば全く現代人に捨てられはしますまいか。

主、いや夫れも亦見やうですよ、近代人が忠君だの愛國だのと云ふことに耳傾けないやうになつたと
いふことは一面から見ればそんな抽象的言葉に捕らはれた封建的思想から放れて直に自己本心の眞實生
活に生きやうとする人類進化の一大轉期かも知れません。今日のやうな半開的日本人が西洋諸國に對し
て大和魂も變なものです、日本男子などと誇るのもあまりに子供らしいのです。況や近頃の既成宗教に
近代人が耳傾けぬといふことは更らに夫よりも大なる眞實の宗教を求むる姿かも知れませんよ。

客、なるほど、然乍ら、私共は現代の社會をこのまゝに安心して文化過程の一經過として觀てゐても
よいものでせうか。

主、いやさういふ意味で安心してよいといふものではありません、私のいふ意味は現代を見るに單なる
行づまりと見ずして來るべき時代に於ける眞實生活の前提として現代を見るのです、いはゞ此の世を行
つまりと見て悲觀せずむしろ眞實人生に轉向すべき一大展開期と自覺して、無限の理想と喜びと力の
生活に立つべきことを云ふのです。

客、でも私共にはどうしても行づまりの方ばかりが見え、未だ新生の世界が見えませんが、まだどう

主、いやあなた許りではありますまい、殆んど世間のすべてがさうなのでせう。さうして又今のまゝ
ですゝむならば殆んど世界の 大勢は益々行つまりです、近頃の國際問題、國體問題、資本と勞働、男
女問題、經濟、生活の問題など一として行づまりでないものはありますまい。既成宗教も其の一つで
す。

客、時に其の既成宗教ですが實は私も近頃しきりに其の問題を考へるやうになりましたが、まだどう
も解決を得ないで困つて居ります。

主、何で困まるのです。

客、どうも私共のやうな宗教上の素人にはあまりに宗教が多いものですから、どの宗教を信じたらよ
いか判りません。クリスト教はいやだし、神道は浅いし、佛教は困難だし。それに私は坊さんがいやで
すから。

主、どうしてですか、夫にまた何故クリスト教がいやなのです、又神道が浅いのです、そうしてどこ
に佛教が困難でせう。

客、さうつきつめらるれば私も困ります。然し何となく私にはさう思はれてなりません、夫れに近頃の牧師や神主や坊さんを見ると何だか私共の生活と異つた世界の人のやうです、而かも彼等が口先き丈けでは大言をいふてゐるけれども其の自身の内面的生活を見來る時果してどれ丈夫れを信じ又夫れを行はうとしてゐるでせうか、よくよく之を思へばどれもこれも心から信用のできない人ばかりです、かういつては甚だすまないが私はあの姿からがいやなのです、私は未だ嘗て牧師や神主や坊主のやうな生活をしたと思つた事はありません。而してまた彼等に道をきく氣にはなれませんよ。

主、さう凡てを見くびることは考へものでせう。然らばあなたのやうな現在の生活がしたいのか。

客、いやさうでもありません、然乍ら私は思ふのですよ、我々人間といふものはあんな坊主や神主の姿にならないでも、かうした普通人の姿であつて、意義ある生活がされるものではないかと。そうして、牧度や神主や坊主のやつてゐるあんな形式が宗教でないことも事實でせう。だから近時各地に宗教熱が識者の間にも廣く勃興して來ましたが殆んど誰一人だつて是等の人々の門をくぐる人が無いではありませんか。

主、さうですね、さうするとあんなのは宗教ではないと思ひてすか。

客、さあ、宗教で全くないとも云へますまいが先づ古き形式の宗教とでも云つた方がよいでせうよ。

主、世の中にはあなたの云ふやうに一概に一切を一言のもとに云いつくせぬ點もあります。牧師や神主僧侶の中にも幾分かは宗教に生きてゐる人もあるし、又全々眠つてゐる人もあるからです。乍然宗教は自己の宗教として眞實に活きねばなりませんね。

客、私もさう思ひます、然乍ら、どんなのが眞實の宗教に生きる事でせうか。

主、そこです、眞實の宗教に生きるとは自己の眞實に生きることです、牧師や神主や僧侶の生活が必ずしも眞實の自己に生きる唯一の道であるとも云へぬが亦之が眞實の道でないとも云へません、中には宗教といふ一種の教儀や概念を唯一の依所として單なる生活の資とさへしてゐる職業的の者もあります。すが中には自己眞實の本心に目醒めて眞に生きてゐる人もあります。

客、して見ると牧師や神主僧侶の中にも眞實の自己に生きてゐる人と單なる生命のない概念に捕はれてゐる人とあるわけですね。

主、さうですとも、だから一がいには是等の人々をよくいふのも悪くいふのもいけないこととせう。

客、でも世間の人々殊に社會の青年若是有識の人々があまり是等の人々に道を求むるといふことの無いのを見ると果して幾人か之等の道に眞に生きてゐる人があるませうか、心内にあれば色外に顯はるといふから若し幾分ても之等の人々の中に眞實に生きた宗教家があるならば今少しは此の世になすべきこともあるではないでせうか、若夫が無いとして見れば口に色々といふ事を説いて見ても少々あやしいものです。一體今日の宗教家は何に生きてゐるのでせうか。

主、さあ、私も初めにはそんな事を考へて宗教といふものを批評したことがありました、否今日でもなほあなたのやうなことを考へればたまらないほど之等の人々にいや氣がさすのです。私の知つた人々の中にも之等の人々ほど世にいやらしい人はないと思へる人々も多くあります、普通の人でも言はないことと又せないやうなことでも表面丈にはよい人のかほし乍ら反つて言つたりしたりしてゐる人が幾人も

ありますよ、然乍ら之等は暫く別として、一度眼を古今の宗教的偉人に向けて來れば、さすがに偉人の風光は我等の前途の光となつて來る人ばかりです。

客、さうですね、ほんにさういつていたげば人といふ人の中にも色々な人があるけれども、昔から釋迦や孔子やクリストといふやうな人々は實に人格的にも偉大な人であつたと申すではありませんかその他古來から色々な英雅豪傑などといはれる人々も亦えらい人々に異いありますまいが。

主、いや實に釋迦や孔子やクリストは偉人でした。然乍ら單に之等が偉いの其の他の英雄豪傑が偉いのといふ丈ではありません、靜かに自己の本性を尋ねてその靈源に歸り來ると如何なる人々と雖もそこには永遠の生命と限り無き光明の人生に眞に生くべき自己の尊嚴を發見し得るものです。

客、ほんとうに、それが私共にでもさうでせうか。

主、それどころではありません、そこには限り無き不滅の自己と、又限りなき真人の生活があるので、釋迦や孔子やクリストは是等の意味に於て眞に自己に生きた人であつた、而て此點に於ける彼等は實に私共の先輩であり、又理想人であるのです。而て眞實の宗教は是等の人々が眞に生きたるが如く私共も亦眞に生ることです、世人は釋迦や孔子やクリストが偉大であるといふことはよく云います、然乍ら、何故に彼等が眞に偉大であるかを知らないのです、而て人が彼等を偉いと云ふから自分も之に倣ふて彼等を偉いといふことはあまりに不見識ではありませんか。だからして、何故に釋尊は偉いのか、どこに孔子は偉人であるか、又何が故にクリストは神の子として崇むるかといふことを眞に解する人は殆んどない、いはゞ彼等がどこに偉大であるかといふことを眞に解しうる人がな

のです。従つて自己の眞生を發見し之を自覺し之を體現するといふことも恐くは殆んど無いといふべきです。

客、然乍ら夫れはどこから來たのでせうか。

主、夫は世人があまりに外のみを見て眞實の自己を見ないからです、否見やうとさへしないからです、だから世間には口では釋迦をほめ、孔子を偉いといひクリストを偉人などと讃めるけれども未だ眞に其の人の偉人であり真人たる處の生命までも探求するものがないのです、釋迦や孔子やクリストは何を語つてゐるのですか、皆悉く私共をして彼等のありし如く私共にもあれとして其の道を説いているのです、然るに多くの人は之等の道を説き道を體驗した人々をたゞ單に偉大だと賞讃するに止まつて未だ嘗て眞に之等と等しき真人の生活に入らうとする人々の出でないといふことはむしろ不思議といふべきです、而して此の傾向の最も甚いものが其の宗其の派に屬している牧師神主僧侶に多いといふことも確かにをかしいことなのです、彼等は其の道を慕ふ意味に於て此の道の先覺者を尊拜するのでせう。然乍ら未だ其の尊拜すべき何等の要點も知らず又未だ自から之に倣ひ又之を體驗せんとの何等の希望もないといふに至つてはむしろ眞實の宗教を毒するものといふべきです。

客、して見ると多くの人の偉人崇拜は一種の偶像崇拜のやうですね。

主、さうですとも最多くの人の宗教は最も底級な一種の偶像崇拜です、其の證據にはどこに彼等の人格的向上の生活が見えますか。尤も畫像木像を以て直に本佛かのやうに満足している輩もある世の中、之等の偉人崇拜が單なる偶像崇拜になり終らうとするのも亦無理からぬ事でせう。

客、時に、偶像といふことで思いつきましたか近頃念佛信者の中で念佛中見佛したなどと言わぬ人が時折りあるといふことをきくますがあれはほんとうの見佛でせうか。

主、さあ、失れもよく々々其の人の人格なり生活なりを見てからでないか一種の幻影かも知れませんが、私も時々見佛したなど云ふ人のあるよしをきくますが少々あやしいことだと思つています。

客、して見ると見佛などと云ふことは全く虚事ですか。一體見佛などいふことはあり得ことですか。世間では随分夫れで迷つてゐるやうですよ。

主、いや決してあり得ない事ではありません、クリスト教でも見神などいふことがあり、佛教でも見佛といふことはあり得ることなのです。又かの孔子教などでも天命を知るとか天に祈るなどのことがあるのを以つて見れば又天を見るとか天帝を拜むとかいふことがいへぬものでもあるまいかと思ひます。

客、して見ると念佛中見佛するといふことはありうることでせうか。

主、夫れはありうることでせう。少くとも佛説として傳へられてある佛典の中には明かに見佛しうることが書いてあります然し乍ら近頃見佛などしたといふ人々が果して眞佛を拜したかどうかといふことは随分とあやしいものではないかと思へてなりません。

客、なぜでせうか。

主、信仰がないからです、信仰がなくて何の見佛でせう。中には自分が見た佛を眞佛かどうか人に尋ねる人さへあると云ふに至つては一層にをかしい事ではありませんか、自分が見た佛が眞物かにせよ

のかの區別さへつかぬものが何で眞佛を見たといへませう。若し之をしも眞佛を見たといへるならば幻影や自己催眠中に見た關示的偶像とどこに異なる處があります。

客、さうきけば更らにをかしい話がありますよ自分にはまだ佛も見ただ事もなく、誰が見たの彼が見たのと恰も自分でも佛を見て來たかの如くに人の見佛したといふのをまじめに人に紹介する人もあるとのことです、而かも見佛したといふ人が自分で之を眞佛と判じきらぬので之を其の人に尋ねると夫は眞佛だから一層念佛しなさいなどと申し勸むる人もあるといふことです、未だ自分に見佛したことのない人が、どうして他人の見佛を正しいと承認することができでせうね。

主、私もそんな人があるといふことをうす々はききました、尤も其の人にあつて直接にきいたことでないから直に之をさうとも云いかねますが若しそんな人があつたとしたら夫れこそ一種のかたりに過ぎぬ俗僧の誤りですよ、中には知りもせぬくせに夫は見佛の一種だの、もうすぐに見佛ができるのだと信者に對してさも々々事實さうに云ふ人さへあるとのこと、而かも夫が爲めに其の信者は其の初めのほどは大喜びで一心になつて念佛したけれども其後どうしても見佛ができぬので遂に狂氣人となつたといふことをさへききました。之などは惡意から出たことではないとしてもかゝることがこの爲めに幾多の人々をあやましめ迷信に陥らしめるといふことは大いに反省すべきことでせう。凡俗の關示は遂に凡俗に終はるものです。(續)

偈曰『若色を以て我を見、音聲を以て我を求むれば是の人は邪道を行ず、如來を見る能はず』

廢物利用の文化(二)

中井 常次郎

虛妄なき佛説

釋尊金口の岩清水は一切衆生を更生せしむる靈藥なりと云ふに、時ふりて名利に汚れたる僧侶の間を流るゝ時は、汚物を混じ惡臭を放つに至り人をして此の靈泉に接近せしめざるに至らしむ。けれども大法親はかゝる恐るべき毒藥を利用し、以て文明の利器を造らせ給ふ。その有様を少しく拜寫しやうと思ふ。

名利は解脱を求むる道士の捨離する煩惱である。追へども影の如くに來り、美顔和語もて進路を塞ぐは此の恐るべき名利である。三尺の童子より、白髮の老人に至るまで溺るゝは此の三途の流れである。

人が生理的廢物を以つて植物を育て、それを利用して己が肉身を養ふ如くに、聖者の捨離する名利といふ廢物を吾人凡俗は好んで追ひ食ひ、三惡道の料理場に上るを知らずして日夜爭ひ求めて停

まぬ。文明の利器は多く斯る哀れ憐むべき無宗教者によりて造られ、精微、巧妙、便利至極の境に到りつゝあるのである。今や一度勞れたる旅寐の枕を横ふれば、旭光車窓に爽快の曉天を現はす頃身は既に數百哩の鐵路を後にして有爲の身ながら神速の影を喜ぶことが出来る。大船の航海は波上に殿堂を走らせ安樂快美の術を盡し、昔の恐怖は拭はれて今は愉快なりし航路の追懷を夢見る世となつた。又昔は難獲希有なりし珍書をも今は小錢を以て容易に小都市の店頭にさへ求め得られる。

又苦粒々の機械器具をも世界の際に呼ぶも易々樂々といふに至つた。是れ何の產物であらふか。發明者を罰し、研究家を罵倒し、工作を妨害せずとも唯單に彼等より名利を奪ひしならば今、幾若の文化を現前したであらふ。研究に興味を感じ、我は天職を奉ずる賢士は曉天の星の如く、まばらにして如來聖意の權化として身を献げ、苦毒を忍ぶとも菩提速進の爲めに努力せんと志す道士に到りては實に古今些少なりしならんと思ふ。彼の里人が「砲彈よりも恐るべきは氷びつの中の升なり」

と云へり、彼等の活動力は升からでなく升に吞まれ終るのである。吾人凡俗は多くバンニ追はれて勞働する一種の機械のやうである。更に高尚を以て任する人々は利益を追ひ、名譽に焦るゝ才子型廢物燃料機關たる實を現はし文明の先驅者として名を成して居る。皮想の文明は斯くして進行するであらふ、けれども人心は日進月歩の勢を以て三惡道に急ぎつゝあるは歎くべきの至りである。利器の惡用即五欲遂食は苦を増し争を多からしめ暗黒の天地を造るのである。此の夢幻的苦樂に鍊られ廢は利用されて常に眞の文明に貢獻しつゝ有る而して眞の文化は心の世界に常在し、唯物世界に求むべからざるを余は固く信ず。希くは廢物機關とならぬやうに。

大正十一年十二月一日 京都にて

懺悔錄 (其の十一)

演 阿 彌

全世界にみなぎり給ふ私の唯一なる如來様よ。

眞 生

家に歸りましてからの私はアナタの御承知の通り毎日々々一念を通ほす事に就ての工夫が始終行はれる様になりました。それはそれはもう所有る方法を以て講ぜられるのでした。翌年の六月頃迄約三百日程あけても暮れても毎日々々色々の工夫が凝らされるのでした。然し中々甘く行きません。何時でしたか土屋上人に御目にかゝつた時御尋ねして見ました。

「余念雜念をのどくには如何したらよいてけう？」

かう御尋ねした事は一度や二度では無かつたと思ひます。

「雜念起つてもよいではありませんか。」

然しよくないから御尋ねして居るのです。又た或時は

「余念に打て合はない方がよいでせう。」

とも申されました。然し打て合はない様にはなれませんからこそ御尋ねをして居るのですのに

「まあ何と云ふ不親切な善智識だらう？」

と思はずには居られませんでした。今念へば之が

本當の正しい事であつたのですけれど眼がくらがつて居たのですから仕方がありませんでした。それでも或る一つの方法が大分馴れて來ましたし、それに夜分暗闇の中で光彩陸離たる星座の如きものを感じたり、念佛中不圖無想になつた時、月の如きものに見惚れて居つたり、又或時は如來現前の感情で一杯になつて居つたりする事があつて何となく前途が嬉しく思はれるのでした。

九月には辨榮上人の二日間ではあつたが御別時が開かれ、十月にはS上人が一日立寄られ十一月には唐譯で御目にかゝつたU様が三日も泊まつて下すつて皆様で私を誘掖して下さいました。此頃は當地のT上人A町のT上人も熱心な信仰に輝いて居られましたものですから合議の結果教區の講習會を辨榮上人に依る三昧會で大正九年二月十五日から一週間營まれる様になりましたこそ別けても大きな御攝理でありました。

本當に私達は恵まれて居りました。辨榮上人は毎日三度「拾二光」に就ての御話がありました。聞込めば聞込む程尊い御話でした。私達は憧憬と敬

虔と其他所有る宗教的感情に浸つて「噫、偉大なる聖者よ。而して幸福なる私達よ。」と叫ばずには居られませんでした。私達の念佛は熱心でした。殆んど一生懸命でした。三昧道場は崇高と神秘も神清との零團氣で満ちて居りました。深い々々體驗の上から迸出する聖者の言々句々は凡ての人をして神聖と敬虔と憧憬と懺悔とに感泣させました。

ことに六日目の午後の御話に感激した私は其夜の御念佛に死物狂の有様で全く前後を忘却して仕舞しました。一時間半の御念佛がせいせい十分程位にしか覺えませんが、六日間の解體のつかれや足の痛みやは拭つて取つた様に癒つて仕舞しました。

「餘念雜念の起るのは我心に餘祐が有るからだ。無始曠劫以來の煩惱を焼き盡すに油斷があつてはならぬ。今日の御話の樹を栽らんには頻りに斧を下さざる可らずと！。然様だ。煩悩の根を切り倒すべき御念佛の斧に隙間があつてはならぬ。唯だ命を懸けて如來様の只中に我心を投込むより外はないのだ。」

私は有頂天になつて仕舞しました。退場すると直にU上人に話して見ました。

「それは屹度いゝ。御上人に伺つて見たらどう？。」

勧められる儘に伺つて見ますと

「それでよい。それで進みなさい。」

私は興奮して狂氣染みて居ました

「昨年の八九月頃から目をつむると灰色の青白い光を感じます。此御別時中に其光度が増した様ですし又時にはそれに少し黄味を帯びた光輪や或は中の眞黒な光輪を経験しますが、學理上どんな物でせう。矢張幻覺と云つた様なものでせうか。」

「それは一種の明相です。益々御勵みなさい。」
經驗に富まれる聖者の御言葉に私は少なからず喜びました。

「之有る哉。之有る哉。妄想雜念！。夫は畢竟私達の心に餘祐が有るからだ。求道の心篤つければ問題では無い。巖をも通す金鐵の志だに在らば桑の弓でもよいのだ。然様だ。私の今迄は間違つて居つたのだ。私は自分の菩提の爲めには譬へ熱鐵

に身を焼くとも求めでは置かねと云ふ熱烈なる決心を爲す可きなのだ。水の中火の中。そんな事は問題ではない。白熱の如き求道の心！。唯だ夫れさへあればよいのだ。用心工夫。そんな事は問題ぢやない。私は熱心に熱心に如來太靈の中に私の全心全靈を打込めば好いのだ。」

私は私達の休息處に戻るとかう云つて主張しました。而してU上人をS市のA氏と私との三人は其夜再び道場に入つて念佛しました。否な私丈はして見たのです。試したのです。試しが成功する譯がありません。身をもだえ心に鞭打ちましたが如來様と私とは離れ々々で全心全靈どころか一部分も打込めないのです。心は隙間だらけで、とても御話になつたものではありません。

偕で一週間の總てが終りましたからつくづく思ひました。

「信仰。爲めの信仰を求めては居なかつたらうか。俺は僧侶だと云ふ立場に立つては居なかつたか。私は自然人にならなければならぬ。自由人にならなければならぬ。凡ての因襲を離れ

總ての牢獄を破つて誰でもが要求する本當の解脱と本當 往生との爲めに赤裸々に自分の面の皮を引きむく可きである。嗚呼。さるにても私はまだ自分と云ふ者を見た事も無いのだ。面の皮を剥かねばなぬ。

悲痛なる懺悔！是より外には手段は無いのです。私は飾る必要はない。辨榮上人は

「懺悔の涙で壁を溶せ。それでも壁の向ふにはまだ戸がある、戸の向ふにはまだ障子がある。」と仰しやつてでした。

「噫。如來様よ。私はいと罪深き者であります。

私にて私自身に知られて居ない罪が澤山あるらしい御座います。生れない前から澤山の罪が借りてあるらしい御座います。罪があればこそ人間に生れたのでせう。どうもさう思へて來りました。數へ切れ無い山程の罪がありませう。けれど如來様今迄そんな事はちつとも知らなかつたのです。どうぞ許して下さい。如來様の大なる御慈悲の下に御恵を被らねば私は救はれないのです。」

段々と深くなり行く罪の自覺の爲めに頭は丸で

鉛の様に重くなりました。而して涙乍らに廣懺悔の文を読んで味ひました。ヒシヒシと身にせまる懺悔の文句！。何だか皆な私の上に覺えがある様です。

同じ月の下旬に港の寺に行はれた百山老法主の授戒會は本當に私の懺悔の爲に營まれたものでした。

無始曠劫の昔より幾何の罪をなし來つた罪の子は毎日熱心に眞摯に懺悔し禮拜致しました。五體を地に投ずると云ふ事は形式はありませんでした。ハンカチは常に濕めつて居りました。

「噫々罪の子よ。噫々罪の子よ。」

心の中でどんなに叫んだ事でせう。

けれども御念佛は已然として雑念だらけです。

あつ。私は敵本的に懺悔をして居つたのではないでせうか。心の奥では妄念雑念を取る爲に其手段として涙をこぼして居つたのではないでせうか。

「噫々何日になつたら!。」

私はまた逆戻りして仕舞ました。又々上人に教へて頂いた用心に就ての工夫を始めました。

それはもう此頃では如來の實在は理屈無しに疑ふ事は出来なくなつて仕舞つて居りましたから、時には

「私はも信仰に這入つて居るのではないか知ら?。」

と思はれぬ事もありませんでした。靜に考へて見ますれば、まだ本當に如來様にすがること出来ませんでしたし、又た御慈悲を感じると云ふ理念や想念の上では免に角、まだ感情上の事實には成つて居ませんでした。如來様の實在觀にしましては、對面的に客觀的に感ずる丈でありまして、如來様に對する宗教感情としては利己的な憧憬的情念がある斗りでありましたから、信仰とは似て居て實は非なるものであります。

「信とは悟なり。」

と古人も云はれました。よし「悟」と迄は云はれずとも「救」の事實が私の精神の上に證明されてない以上、どうして

「我入信せり。」

と云も切られませう。

それでも或時は黒障を見或時は黄障を感得して「内凡の覺醒」が近付きつゝある様な感も無いでは無いのでした。

噫々私の上に盡くして在ます如來様！

私の信仰道 (二)

小幡 空越

今の場合、今迄は誠に嫌いであつた三角頭の日蓮宗を思ひ浮べて見ますと本門とか迦家とか實に此の宗類の澤山な事は良い加減な事に思はれましたクリスト教は好まないし、聖道門は勿論私の如き者の器ではありません、是はどうしても法然上人を研究して見たいと思ひました、母は別に淨土の事を勧めて呉れますが私の得心がゆかん間は信と云ふ事は起るべきものでありませんから其には古い佛書古文章を見るに限ると思ひました幸ひ宅に佛書のあるのを取り出して拜讀しました、其の書冊の内に善導大師の譯文を見付て繰返し、て彌々法然上人を信じ今まで辿つて來た私

の眞宗の教は違つてゐる事を感じました、幾度拜讀して有難い、若我成佛十方衆生稱我名號下至十聲若不生者不取正覺彼佛今現在世成佛當知本誓重願不虛衆生稱念必得往生と私はこの文が無限に有難く感ぜられました、當時の闇黒心に一道の光明を與へられたのでした。ああ法然上人に依て此の正文に遇せて頂いたのであると喜びました、茲に至つて法然上人は信じましたものゝ淨土宗を信ずる氣になりませぬ、何故に法然上人が信ぜられて淨土宗を信ずる事が出来ないかと申せば先きに法然上人の眞髓は眞宗に傳燈して來て是が本體であると眞宗を信ずる者は皆其様に我人共に信じ來た丈に譬ひ淨土宗と云へ共法然上人の眞髓成教であるやら無いやら、萬一それが眞髓で無い時には又も苦悶を繰返して其淵に沈まねばならず祖師上人の教との違ひを恐れて大事を踏んだのでした、こゝで、法然上人の眞髓成教を眞受したく煩悶に立て苦しみを續けて居りました、實に其時の苦しみと云ふものは尋常ではありません、この時母の切なる話が耳に滲みただけです、淨土宗は多

いけれ共今の世に一向專修と云ふ事は仲々以て耳にする事が出来ぬ、我家の改宗したのも其處に有ると云はれました、其處で此の言を信じて專修一行に深く進みました、頂度三晝夜一心に御念佛を續けました、其後私は一家を起さねばならぬところから思ひ切つて大阪に出ました。時折京都に歸宅致しますと父母は私が信仰を怠ては居ないかと常に注意されるのでした、毎度の手紙も信仰の事斗り呉々も心に掛けて下さつたのです、其れが爲めに信仰心は堅固になつてまいりますが念佛する事が出来ません、空しく年月を送る内に信仰に對する求道心を發す事數度に及び、燃焼の生が思はるゝ様でありました、それから私は獨立を志し、大阪の地に居を構えました、それが爲めに法門を耳にする機會がありません、何とかして良師の教を求めたいと思ひ惱んで居りましたが、近くには眞宗の説教場だけで淨土宗の教を聞く處がありません、殊に專修一行の良師は京阪の地に得難い様に私に思はれてならないのです、多くは法然上人の正流から離れたものゝ様で、單なる因縁因果

や善惡の道理の説明にはもう飽き切つて居りました、如來を信ずる事はとても筆に記す事が出来ません、その信念は眞宗の時代に養ひ得た其體です、改宗後から幾年近く歲月を經て参りましたが、此間に一度も教理を耳にしませんでした、求道心は抑え切れないのです、其の中に恰度今からは拾三四年前に當りますが私の家内は次女を懐妊して身重になつてゐた時です、月は極月何商賣も皆氣ぜむしい時私は風邪を引き込み、口熱で舌が釣り上り、食物は一切、流動物さへも通らせません、言語を發する事も困難を感じ、只ア、ノと云ふ斗りでありました、病の身には醫藥も何の甲斐もありません、家には非常に思ひ患つて居ります、此の様な日が數日續きました、精神

は確かですけれども口に物が通入らないで、餓死するより行き道はないのです、御念佛が響きたくとも、舌が釣上つて難える事出来ず、親族の者も心配して病院に入る事になりました、稍少康を見ると思えば、其處へ折悪く家内が次女を分娩したので、それに三日を経て又その子は死に、折しも正月で世人が樂しみ歩く中に我家は地獄の様な有様です、實に盆と正月が一時に來た様を睡さで、此の時の有様を思ひ出しますと本當に身の毛も逆立つる位で實に悲慘の極みでありました。

昔縁故は請らない事を述べると思召さるゝでもありませんが、私の入信は此の如き經路を通じて行つたのです、以下篇を追ふ中に成程と合點下さる事と信じます。(續) 禮しました。

道友の方々へ

吾國たより

□私は今年の元日には例年にないたくさんの人々から年始の御祝い手紙をいただきました、靜かに思へば一枚々々が皆どれも心からなる私の道友先輩の方々から來たものです、例年になく謂知れぬ喜びと感謝とを禁じ得ませんでした。自然乍ら之と同時に私は此等の年賀についてつく々々考へさせられました、私自身に於ける生命の費へと其の費用の社會への迷惑とを思ふ時何となく是等が形式に走り又私の思策の時間を空費するやうに思はれました、そこで年賀は失

□單なる年賀の印刷すりや人だの
みの年始状で満足することのでき
ぬ私としては四百枚からの年賀に
對する返禮は私の心には苦痛でし
た。

□而も道友先輩を御慕い申す心が
ないかゞては決してありませぬ
私の心には年賀を出さない年ら
にも皆様を御慕ひ申す心は寸毫も
變りませんでした。願くば此の心
を推して失禮であつたとはおどが
め下さいますな。さうして願く
ば今年も亦舊年に倍して更に一
層の向上をいたさして下さい

課代拂込芳名

○拾圓柳河光樹寺様○五圓々々
崇徳寺様、林金三郎様○拾
錢本間榮吉様○參圓五拾錢々々
榮様○參圓中川察道様、桑名光徳

寺様○二圓五十錢藤田高印様○二
圓二十錢安井辨義様○二圓桑名佐
原眞様、本間榮吉様、百々治之助様
廣島縣眞福寺様、松本昇様、桑原省
三様、小田信忠様○一圓五十錢連
藤ふじ技様○一圓三十錢岐阜行基
寺様○一圓貳拾錢岐阜永徳庵様○
一圓足立ゆい様、小林信太郎様、岸
田久藏様、成田治兵衛様、行橋町西
福寺様○一圓十錢岩田致順様○一
圓内藤赴夫様、伊藤萬吉様、伴野三
郎様、成田秀光様、藤森常二様、神
谷秀瑞様○六十錢安中長榮様、猪
狩教子様、小幡爲次郎様○五十錢
西野八治様

△編輯の後に

圖舊臘から同人は皆田舎へ歸つて
居りまして歸京すると早々から一
人寝二人寝で第一先生までが風邪

に罹られて編輯も大變遅らしまし
た。
圖道友先輩から澤山の原稿を戴い
て居りますから追ひ／＼發表させ
て戴きりす紙數の關係上本意なく
途中で切ものを御許し下さい。
□一月の清水寶相寺の三昧會は實
に近來に無い熱列さでした、今や
吾人は見佛だの觀佛だの いふ概
念を打破つて眞に生きた念佛でし
た。

振替口座東京四七五八八番廣生社

大正十一年二月二日第三種郵便物認可
大正十二年二月一日發行毎月一回一日發行
定價一圓十錢 半年六十錢一年一圓

編輯所 東京市芝區芝公園第十四號地九番
發行所 東京市神田區河原町一番地

發行所 東京市外西巢鴨町二七二三番地

印刷人 原 子 廣 宣

印刷所 無我山房印刷工場